

— みんなの力で おいしいマグロを いつまでも —

発行・社団法人 責任あるまぐろ漁業推進機構

## マグロ資源管理—日本がリーダーシップを!

東京大学大学院農学生命科学研究科 特任准教授 八木信行氏

「日本の資源管理の手法が海外に知られていない。それを知らせるのが私の役割」と、さわやかな笑顔を見せるのが、東京大学大学院の八木特任准教授。マグロひとつをとっても、「日本が食べ尽くすからだ」など、海外から批判されることの多い日本だが、そうした批判の背景に、日本の漁業に対する国内外での取り組みが正確に海外に伝えられていないことがある。多くの国際交渉に関わった経験を持ちながら、日本と海外の漁業事情を冷静に見つめる八木特任准教授に、マグロ資源をめぐる問題について聞いてみた。(インタビュー・浮須雅樹)

### お門違いなマグロ管理機関批判

—最近、大西洋マグロ類保存国際委員会 (ICCAT) などマグロの資源管理機関 (RFMO) が機能していないと批判されているが、なぜ機能しないのか?

八木 大きな理由に、ICCATなどのRFMOには、強力な合意形成機能の無いことが批判を招く一因になっていると思う。資源の悪化に対して大胆に漁獲量を削減しようとしても、都合の悪い国は異議申し立てができる機関もあるし、全会一致でないと漁獲量削減を決めることさえできない機関もある。都合の悪い国は、そうした態度を示すことで、規制をできるだけ先送りできる。会議で合意されても、「守りません」と言うことが通用するので、実際の管理はなかなか進まず、それが批判を招く結果になっている。しかも、国際機関は、脱退するの自由。管理を強化しすぎれば、脱退すればいい。各国ともそうした考えのもと加入しているので、管理の方針はなかなか決められない。

—なるほど、管理を進めるのに環境が整備されていないと。

八木 そう。中には、「マグロを

管理する国際機関は生ぬるい。ちゃんと管理できていない」などと批判する人がいるが、そういう問題ではない。先ほど述べたような国際機関の構造があるので、国内で法律を守らせるのとは全く違う。それを、あたかも同じもののように捉えて議論するところが間違い。

—では、国際管理機関は必要ない?

八木 そうではない。機能をしっかり持たせればいい。たとえば、国際条約に基づく国際機関の中で一番ルールを守らせるのに成功しているのは国際貿易機関 (WTO)。なぜ加盟国にルールを守らせられるのかと言えば、WTOは紛争処理機関を持っていることが大きい。そこがマグロの国際管理機関と大きく違う。

—と言っても、WTOもなかなか前に進まない印象が強いが。

八木 確かにWTOも長年、揉めて先に進めないでいる。しかし、それは新しいことを取り入れようとしているため。今ある仕組みを守らせるといふ点ではWTOは一応しっかり機能している。

—マグロ管理機関はどうすればいいか?

八木 WTOの場合、脱退すると、



WTOに加盟している国とそうでない国で関税が違ってくる。入っているメリットがWTOには明確にある。似たようなメリットを、マグロの国際機関に入っている国が享受する仕組みを作ること、または脱退することでデメリットが生じるような仕組みを作ることが重要。

—漁獲枠が与えられるメリットがあるのでは?

八木 いや。枠はあくまで加盟国の間でとりきめたもので、脱退すれば逆に自由に操業できてしまう。国際的な批判の対象にはなるが、強制的に取り締まることはできない。国連公海漁業協定への参加が低調な現在、それはなおさらだ。この現状では、マグロの管理機関は、ゆっくりゆっくり合意形成して脱落者がでないようにして資源管理を進めていく構造にならざるを得ない。

(2面につづく)

(1面からつづく)

——マグロ管理機関が機能しないから、ワシントン条約締約国会議(CITES)で管理する方がいいという声もあった。

八木 CITESは、取引を禁止させる大ナタは振るえるが、漁業資源を順応的に管理するような小回りがきく場所ではない。CITESで取引禁止を主張する国が、一方ではWTOで魚の関税をゼロにすべきだと主張している。日本は2003年にWTOに対してある提案をしている。資源量が減っている魚を自由化させるのをやめようという提案をしたが、そのような国から反対された経緯がある。「世界で魚の資源管理を完璧に行っているので、貿易の完全自由化をしても、資源には影響を与えない、従って、今、貿易の自由化をすべきだ。」という意見を彼らは述べていた。欧米の人々の間に、市場国である日本がどんどん輸入するから大西洋クロマグロが枯渇すると主張している人がいるが全く無責任な発言だ。日本が輸入を差し止めるなどすれば、それこそWTO違反で彼らは訴えてくるだろう。日本が貿易管理をするよりも、欧州諸国が漁獲管理をしっかりする方が先のはずだ。

やはりマグロは、WTOで自由化、一方、CITESで貿易禁止という両極端な規制のはざままで、どうマグロの資源をしっかりと管理する仕組みをつくるかが重要だ。

——マグロ管理機関がしっかり資源管理するためにはどうすればいいのか？

八木 いまクロマグロやミナミマグロなどで行われているが、統計証明制度で始まった漁獲証明制度など、貿易制限を伴う仕組みをもっといろんなマグロに適用し、国際機関の機能を強化していけばいいと思う。そうした制度は「ゆるい」という批判もあるだろうが、それがあっても資源管理の機能を果たすことは可能だ。日本は、そうした仕組みづくりについてこれまで以上にリーダーシップをとり、また市場国としても、制度を機能させる取り組みを進める必要があるだろう。

### まき網対策は焦眉の急

——管理方法以外に、いまのマグロ資源の問題では、まき網による影響の強さが指摘されている。

八木 これからは、まき網の問題を優先して取り組まないといけないうだろう。過去のデータを見ても、はえ縄の漁獲量は横ばいか減っている一方で、まき網は急激に伸びている。それと資源の悪化が同じだ。急激に伸びているまき網を優先して厳しく取り締まらなければ、マグロ資源を本当に管理することはできない。

——しかし、まき網問題はなかなか対策が打たれない

八木 国際機関での合意形成が難しい点は先ほど指摘したとおりだが、特にまき網漁業国は数が多く、従って利害関係者も多いため、規制を導入するのは非常に難しい。しかし、もはや避けては通れない。まき網の対象魚種にも統計証明制度のような貿易制限をかけるとか、マグロの集魚装置(FADs)を使うような操業をしている船のマグロは買いませんとか、そもそもマグロの資源管理をトン数管理から尾数管理にするとか、大胆な仕組みを提案することが重要。いまマグロの資源にもっともダメージを与えているまき網漁業をコントロールせずに、はえ縄の管理体制ばかり整備しても焼け石に水ではないか。

### 日本がリーダーシップを

——どうすれば進めることができるのか？

八木 やはり日本がリーダーシップをとるしかない。なぜならば、日本は刺身マグロだけでなく、まき網で漁獲するマグロやカツオも食べる国だからだ。わたしはそもそも自分の国が食べるものを獲るのは解るが、食べもしない国が魚を輸出して商売するためだけに獲っている漁業には根本的な問題があると思う。食べる国ならば、獲る量をコントロールしマグロ資源を悪化させないよう努力する。なぜならば、獲れなくなったら自分たちが困るからだ。しかし、輸出して儲けようとしている一部の国は、そんなことは構わない。短期で効率的に儲けようとするので、一気に投資して元を稼ぎ、資源がなくなったら撤退する。それで商売は成り立つ。取り尽くすことに抵抗がない。経済学的な用語を使えば、輸出専用型の漁業は割引率が高く、自国で消費する自給自足型の漁業は割引率が低い。今増えている輸出国のまき網はまさに、割引率が高く、リスクな漁業だ。リスクな漁業と、そうでも

ないものを一緒に考えることに間違いがある。そうした状況を放置することが、魚の再生産サイクルを崩壊させてしまい、マグロの資源を悪化させてしまう。だからこそ、ずっと利用したいと思っている日本のような国がリーダーシップをとって、世界をリードし資源管理の形をつくるしかない。マグロを投機の対象にしてはいけない。

——一方、日本のような漁業先進国は、途上国の漁業の発展を阻害できない。資源管理と途上国の発展をどう両立させることができるか？

八木 途上国が発展したいというのを阻止することはできない。しかし、枯渇しかかっているマグロ資源を更に枯渇させれば、関係する途上国も困るはず。そこは、マグロの国際規制による貿易制限でコントロールするしかない。それに、途上国の中でもまき網漁業を発展させたいだけの勢力ばかりではないはずだ。まき網漁業を発展させることで沿岸漁業が影響を受け、資源が悪化することを懸念している勢力もあるはずだ。途上国は経済発展をしたいはず、という紋切り型の考えにはとらわれず、しっかりと相手国をみて対応していけないといけない。

### まき網漁業もOPRTの会員に

——OPRTに対する期待は？

八木 もう少し勢力を拡大すべき。とくにまき網漁船も会員の対象に加えた方がいい。資源の奪い合いは、知らないもの同士が競いあうから起こる。漁業者間の協調・調整ができていないと「共有地の悲劇(コモンズの悲劇)」が起きる。ところが見知合いの当事者同士が調整しながら資源を利用すれば「共有地の悲劇」にはならない。ちなみに、このようにして共有地の悲劇が回避できることを研究したオストロムは2009年のノーベル経済学賞を受賞した。その意味でOPRTの役割が大きい。日本の沿岸の資源管理といっしょ。政府というワンクッションが無いこともいい。OPRTは、漁業者同士でマグロの資源管理を話し合う場、組織になって欲しい。もちろんマグロ漁業のように漁場で見える範囲で操業を調整するのは勝手が違うが、それでも漁業者同志で管理を考えていく核として、まき網も取り込みながらその役割を担ってもらいたい。期待は大きい。



## はえ縄漁の価値、国際的に見直しの方向に

OPRT セミナーで三宅氏が講演



「マグロ資源の持続的利用・過剰漁獲能力解決への道—はえ縄とまき網の立場は？」をテーマとしたOPRTのセミナーが6月23日、東京で開かれた。国連食糧農業機関（FAO）マグロ漁獲能力問題専門委員の三宅眞氏が講演し、最新の研究事例などに触れながら、世界的に「はえ縄の価値を見直す動きが進行している」と説明（写真）した。

三宅氏は、台湾の研究者が「東太平洋でははえ縄とまき網の経済的損得」について発表した研究成果を紹介。

その中で、まき網の漁獲量を1トンを減らせば、はえ縄によるメバチの漁獲量が3.85トン増加するとし、この際にまき網の経済的な損失が1510ドルとなる一方で、はえ縄では3万6878ドルの利益増となると試算。まき網

とはえ縄のマグロ漁獲をトータルで考えれば経済的に大きなメリットが出てくるとしている。

さらにFADs（人工集魚装置・浮魚礁）の漁獲約300トンを削減するとまき網の漁獲金額は45万ドル減となるが、その代わりにのはえ縄の漁獲量が1170トン増え、漁獲金額も1074万ドル増加すると試算。

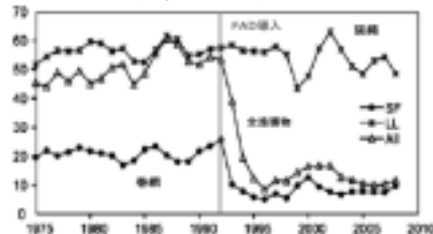
三宅氏は「はえ縄による漁業が拡大すれば、持続的な最大利潤が増加する」と解説。さらに、はえ縄漁業は魚種や漁獲サイズを選択的に漁獲できる他、漁業管理が行いやすく、科学的データも豊富に得られる」

「刺身市場の世界的拡大ではえ縄で漁獲されるマグロの需要が増大」「最近では世界的にはえ縄漁への認識が改まってきており、環境保護団体も（はえ縄漁業のクリーンさを）認め始め

ている」こと等からはえ縄漁の未来は明るいと語った。

また、「いずれにしても、まき網漁の小型マグロ漁獲は資源の無駄使いであり、その回避は至上命令というのが世界の世論だ」と述べるとともに、「しかし、はえ縄の場合は生産コストが高くつくことから、缶詰向けの供給を考えた場合、まき網が減った分をはえ縄の漁獲で補うことは不可能であると指摘。三宅氏は「はえ縄ははえ縄なりに、まき網はまき網なりに生きる道がある」とし、「まき網が小さい魚や幼魚を獲りさえしなければ、両方の漁業は完全に共存できる」と訴えた。

東太平洋メバチ平均体重



イタリアのサルジニア島に隣接して存在するサンマルコ島と言う芥子粒のような小島にカルロホルテという町がある。この町は夏の間だけ保養地となっていて、ヨーロッパ各地から観光客が押し寄せる。ここでは、毎年、6月にマグロ祭りが行われ、種々の出店などが港ぞいの通りに出たりしてにぎわう。目玉は、このサンマルコ島にあるマグロの定置網に入るクロマグロである。カルロホルテに来たのは、7年前に一度、そして今年で2度目であり、いずれもマグロ祭りの際に行われるサルジニア自治州主催のクロマグロのシンポジウムに講演者として招待され出かけてきた。

この島の定置網について少し紹介しよう。この島にある定置網は、数百年前から行われており、今回も以前来た時とあまり変わらない。今は、ジェノア出身の網元が経営しており、以前は、今の10倍くらいの2000トンほど獲った年もあるとのことである。定置の規模はそれほど大きい方ではないが、マタンサ（と殺）と呼ばれる網起しの時の漁獲の様子は壮観である。これを見ようと、観光船がお

客をわんさと乗せてやってきて、さながら、闘牛の観戦をしているような風である。この定置網では、今はやりの畜養は一切しない、すべて、水揚げして、生鮮で出し、残りは冷凍しておいたものを、冬場の閑散期に缶詰にするという。今の10倍ほどの規模で缶詰を製造していた頃の大釜、煙突、あき缶などが、まるでポンペイの遺跡のように放置されている。今、小規模に作られている缶詰は、超

用されている。

ワシントン条約会議による「大西洋クロマグロ絶滅危惧種指定」提案で大揺れであった今年も、地中海のクロマグロの漁獲枠が大幅に減らされて、イタリアも大変であった。しかしながら、定置網は伝統的な価値と実績が評価され、まき網のような漁獲量の削減はなかったようである。（モロッコの定置網では、20ヶ統ほどある現有勢力を15ほどに削減したうえで、

割当て量以上に入ってきたクロマグロを数百トンも逃がさなければいけなかったようである。）まき網業者は、身から出たさびとはいえ、大きな打撃を受けざるを得なかった。この平和で美しい小島の定置網が、7年前とあまり変わらず、しかも、単に生鮮マグロを生産するだけでなく、観光客を積極的に取り込んで、水揚げを見せたり、ダイバーをマグロと一緒に泳がせたり、超高級品の缶詰の生産を本格的に再開したりと、多様化した様子を見て、安心するとともに、研究者として、資源の持続利用への責任を痛感させられた旅であった。

鈴木治郎

## マグロあれこれ 科学者の目

第18回

地中海クロマグロ漁の原点—カルロホルテ再訪

高級品で、贈答用の正真正銘のオリブオイル漬けクロマグロとなる。缶詰にも、赤身、中トロ、大トロの区別があり、もちろん大トロが一番高い。最近では経営の多角化で、マグロが入ったときには、マグロと一緒にダイバーを潜らせて、マグロを身近に見せている（料金は一人7000円ほどで50人近く潜らせる）。卵巣や内臓の塩蔵品は、漁師の取り分となり、有名な卵巣の塩漬（ポツタルガ）や心臓、胃袋なども同じく塩乾品として利

用されている。この平和で美しい小島の定置網が、7年前とあまり変わらず、しかも、単に生鮮マグロを生産するだけでなく、観光客を積極的に取り込んで、水揚げを見せたり、ダイバーをマグロと一緒に泳がせたり、超高級品の缶詰の生産を本格的に再開したりと、多様化した様子を見て、安心するとともに、研究者として、資源の持続利用への責任を痛感させられた旅であった。

## まき網漁船・2割減船提案へ

中西部太平洋で操業する漁業先進国のまき網漁船対象に  
歯止めかからぬ状況に一石を投じる

6月29日から7月1日まで、ブリスベン（豪州）で開催されたまぐろ類地域漁業管理機関（RFMOs）の合同作業部会で、日本政府（水産庁）は、南太平洋で操業する漁業先進国のまき網漁船2割減船を提案した。今も、まき網漁船が建造され続けているなど増隻に歯止めがかからない中で、責任ある漁業国として、率先



小型マグロの漁獲抑制を訴える尾崎OPRTサポーター

して取り組む姿勢を示した。

日本が提案したのは、特にまき網漁船の増加が問題となっている中西部太平洋での減船。漁業先進国（米国、EU、韓国、中国、台湾、日本、フィリピン）のまき網漁船を2割減らすのが骨子だ。途上国の漁業発展の権利を尊重しなければならない状況の中、まず、漁業先進国が減船することで、関係国全てのまき網漁船隻数を削減の方向に持っていくのがねらい。

日本の提案に対し、各国は趣旨に賛同しつつも、直ちに削減することには、難色を示した。また、南太平洋島嶼国から「途上国の漁業発展を阻害するのではないか」との疑問も呈され、そのまま受け入れられるには、到らなかった。ただ、中西部太平洋で「これ以上、まき網漁船の増隻を行う状況にはない、必要があれば減

船すべき」との理解も広まり、「まき網漁船の増大は問題だ」との認識は一致した。また、各海域の漁業管理機関で過剰漁獲問題の解決に向け具体的措置の検討を、更に続けることとなった。

### 小型マグロの多獲防止の即時導入をOPRTが訴え！

RFMO合同作業部会では、国際はえ縄漁業界を代表して、尾崎英子OPRT海外活動サポーターが、これまでOPRTが各国会員とともに、行ってきたマグロの過剰漁獲の抑制努力を紹介した。（OPRTは、入会の条件に、大型はえ縄漁船の隻数抑制への同意を求めている。）

また、2000年当時、約250隻あった国際ルールを守らない便宜置籍マグロ漁船の廃絶のキッカケとなったOPRTの漁船スクラップ事業を紹介するとともに、各国政府、各RFMOと業界の一致した対策の実施があれば、問題の解決が図られると強調した。

最後に、まき網漁船が集魚装置（FADs）を使って操業する際に、小型メバチ・キハダを大量に漁獲する結果、資源に悪影響を与えており、小型マグロの漁獲を抑制する措置を全てのRFMOが速やかに導入するよう訴えた。

史上2位の445キロ

## 長崎対馬産320万円

### 巨大国産マグロが入荷

築地市場に7月16日朝、長崎県の対馬から定置網で漁獲された重さ445キロ、全長約2.5メートルの超特大クロマグロが入荷した。

同市場に入荷した国産クロマグロとしては、過去30年の中でも昭和61年の宮崎県油津産496キロに次ぐ史上2番目の大きさ。

セリではキロ7,200円、1尾で320万円余りの値が付いた。握り寿司にするとおよそ1万3千個ができる量。

## ～賛助会員の声～

阿部 園子さん



・マグロはよく食べますか？

産地や種類を気にしながらよく頂いています。

・ご家族の皆さんはマグロが好きですか？

母親が魚の中ではマグロが一番好きだと常々話しています。

・マグロの値段はどう思われますか？

種類にもよりますが、あまり安価で叩き売られているのを見ると切ない気持ちに……。

・OPRT賛助会員になられたキッカケは？

フィッシュロックバンド漁港のライブでOPRTの存在を知りました。

・OPRTニュースレターはお読みになりますか？内容等はいかがですか？

ニュースレターは一号一号が完全保存版です。マグロに関する様々な人の真摯な思いを知ることが出来るので、読み物として楽しんでいます。

・OPRTホームページはご覧になったことがありますか。内容等いかがですか？

マグロのありとあらゆる情報が網羅されているので、外国人の友人にも紹介させていただきました。

・OPRTの年末恒例、賛助会員懇親会はいかがでしたか？

賛助会員同士で仲良くなり、連絡先を交換したり、交流の輪が広がっています。

### 編集後記

日本列島は連日の猛暑だが、マグロをめぐる話題もホット。中でも、ブリスベンの会議で、日本政府が、敢然と提案した先進国のまき網漁船20%削減には、各国が熱がったようだ。八木先生が、WTO交渉等の豊富な経験から、各国の利害が対立する中で実効ある国際合意を形成するために、「主導的役割を果たすのは、日本」と明快。また、「拡大を続ける外国まき網漁船問題の解決は、焦眉の急」とも指摘。OPRTも微力を尽くすが、水産庁に是非とも頑張ってもらいたい。（原田）